博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	田中　麻帆
論　文　題　目	ホックニーの芸術における「パースペクティヴ」 ――独自の視覚論の再検討を中心に――

審査要旨

2017 年 11 月 29 日（水）16:00～17:50 分まで、早稲田大学戸山キャンパス 39 号館第 5 会議室において公開審査会を行った。審査委員 3 名のほか、教員、大学院生等 20 数名の参加を得た。

まず田中麻帆氏が、論文の概要を記載した資料を配布の上、パワーポイントを使って 40 分ほどの発表を行った。論文は全 6 章からなるが、1 章から 5 章について、それぞれ簡単に内容が説明された後、論文のなかでももっとも核となる第 2 章について詳しく述べられた。 論文の概要は以下の通りである。

第 1 章は、ホックニーの写真コラージュ作品の意味を、「記憶」の視点から、改めてとらえ直そうとしたものである。ここでは 1982 年から 86 年にかけて制作された写真コラージュ作品 98 点をとりあげ、時間の表現方法について、画面構造を詳細に分析することで検討された。その結果、彼の作品と、自身が説明する視覚論との関連性が明らかにされた。

第 2 章は、ホックニー芸術にみられる「記憶」への関心の背景を探るべく、彼がマルセル・プルーストの小説、『失われた時を求めて』を愛読していたことに着目し、これまでの研究においては詳しく指摘されてこなかった同小説との関連性を指摘したものである。1970 年代の作品において、プルーストの影響は、エピソードの類似性やモチーフの選択といった部分においてすでに見出せるが、1980 年代の作品になると、制作方法や作品構造、ひいては制作理念とったより深い意味においても、プルーストと関連があることが証明された。

第 3 章は、ホックニー作品をキュビスムとの影響関係から考察したものである。とりわけ、1982 年前後に試みられた一連の作品群を分析・考察したところ、ホックニーの試みたキュビスム、あるいはホックニーの言説は、従来指摘されてきたピカソよりも、むしろサロン・キュビストといわれた別のアーティストたちのものに近いことが示された。

第 4 章は、1981 年に初演されたオペラ「フランス三部作」のためにホックニーがデザインした舞台美術を対象とした研究である。この舞台美術に関する着想源としては、これまでピカソの作例が指摘されてきたが、細部における再検討の結果、ホックニーがピカソのみならず、1910 年代から 20 年代におけるさまざまな画家、音楽家、文学者、デザイナーら同時代のアーティストが共有していた要素をたくみに採り入れ、創作したものであることが明らかにされた。

第 5 章は、彼の作品に頻出するカーテンのモチーフに着目し、その意味内容の検討から、ホックニー芸術の本質の一端を解き明かそうとしたものである。1963 年の「カーテン・シリーズ」を中心にカーテンを描いた作品の制作背景を詳細に分析することで、カーテンのモチーフには、批評家グリーンバーグや同時期の美術界の動向との関係、さらには、同性愛をめぐるイギリスの社会的背景や自身のアイデンティティといった諸問題の反映を見出せる可能性が示された。

第 6 章は、ホックニー芸術を日本美術における空間表現との関連性から分析したものである。ホックニーは 1971 年に初来日したのを機に、一点透視図法による自然主義的な構図から脱却したと言われてきたものの、具体的な根拠が示されずにいた。これについて本章では、実際に彼が日本で目にしたと思われる日本画の着想源を特定し、その影響が明らかにされた。また龍安寺の造園法および石庭の鑑賞法、日本の絵巻物との関

氏名　田中 麻帆

連性についても、作品分析から示唆された。以上全 6 章による考察の結果、これまで総合的に示されることのなかったホックニー芸術における豊かな源泉およびその多様性が示された。

審査会では、田中氏の発表に続き、主任審査員、続いて審査委員から講評が述べられると同時に質問が行われた。その後、さらに他の参加者からも意見が述べられ、活発な質疑が繰り返された。そこで出された主な質問および意見、指摘は以下の通りである。

①キュビスムの観点からの分析はよくなされている一方で、同様に時間を問題としたモネやドガなど印象派について言及がないが、どのように考えるか。②写真作品を扱った論文であるため、ロラン・バルトの参照が欲しかった。③「構造主義」、「政治性」といった言葉の使い方が曖昧だが、いかなる意味で使われているか。 ④カーテンのモチーフについては、マグリットの参照があるとより有効だったと考えられる。⑤舞台デザインを扱った 4 章が構成上あまりうまく他の章と連動していないように読める。⑥「パースペクティヴ」という視点の切り口がホックニー芸術を論じるのに、適切であるかどうか。⑦時間の「永遠化」についてはどのように考えるか。⑧論文の中心をなす「記憶」や「時間」について、《龍安寺》のような作例では明快に見出せるが、《ブロッサム・ハイウェイ》のように見出しにくいものはどう説明されるか。⑨ホックニー作品については、例えば「主体」といった概念を核にすると有効に論じることができるのではないか。

以上、審査会での発表、質疑応答を踏まえ、その後審査委員の間で話し合いがもたれた。田中氏の論文では、ホックニーを「ポップアーティスト」として捉えるのは適切な視点ではないとされながらも、それに代わるホックニーの美術史の文脈における具体的な位置づけはいまだ曖昧であり、今後の課題として残されているとはいえ、本論文が、ホックニー芸術の本質を総合的に考察した論考としては、国内外を通してはじめての研究である点を考慮すると、最初の一歩を踏み出したという意味での業績は大きなものであり、おおいに評価できると考えられる。また、現代美術の研究ではあるものの、ルネサンス美術から 20 世紀アートまで、さらには中国美術・日本美術と、時間的および空間的に幅広い観点から考察を行っている視野の広さは、田中氏の美術史にかかわる深い学識を基盤としたものとして特筆すべきである。展覧会カタログから伝記、批評記事、画集などじつに多くの資料を収集、駆使し、作品、文献資料をともに詳細に分析、精査している点には美術史学の基本的研究姿勢を見出すことができる。また、画家自身が語る「パースペクティヴ」という言葉を核として、実際の作品における視覚・空間・時間といった問題を総合的に展開したテーマ設定、および論の構成、論述についても、見事と言える。以上のような理由から本論考は、本格的なホックニー論として高く評価できる内容であると考えられ、審査委員全員一致で、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断された。

公開審査会開催日	2017 年 11 月 29　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	坂上　桂子	西洋美術史	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	益田　朋幸	西洋美術史	博士（ギリシア国立テサロニキ大学）
審査委員	成城大学・教授	喜多崎　親	西洋美術史	博士（早稲田大学）